

谷徹著 勁草書房 1998年

『意識の自然 — 現象学の可能性を拓く—』

加藤 英一

初学者にとって、現象学という学問を理解することは困難を極める。現象学には門外漢である拙者自身も、その1人である。現象学を理解することが、何故これほど困難であるのかを考えると、何よりもその抽象性にあると思われる。確かにその説明において、具体的な例も示されることはある。しかしそれによってここでの抽象性が克服され、読者の理解を助けることができるとは言い難い。

それでは現象学という学問が、何故にこれほどまでに抽象度が高いのであろうか。まず現象学とは、他の自然科学や人文科学、そして社会科学のような特定の事象、例えば具体的な物理的事象や経済や法律の具体的な社会的事象を研究の対象としているのではない。むしろ現象学では、これらの学問が対象としている事象そのものを問うているのである。「事象とは何か」を探究する試みが現象学である。それ故に現象学は、全ての学問の基盤となるものである。

このように現象学とは、他の学問のように具体的な自然事象や社会事象を扱うものではなく、またある種の理論というわけでもない。その背景には、近代以降急速に発展した自然科学に対する批判がある。特に自然科学における、客観性を絶対視する姿勢に疑問を投げかけているのである。

本書は、このような難解な現象学を学ぶにあたり非常に助けになる1冊である。現象学を学ぼうとする、多くの人が入門書として読む本の1冊に『これが現象学だ』(講談社現代新書1635)が挙げられる。この書籍の著者は、本書と同じ谷徹氏である。『これが現象学だ』が初級とすれば、本書は中級から上級という位置づけができよう。

まず本書が2段組みの700ページを超える大著であることに驚かされる。内容そのものは高度な学術本であるものの、文章そのものは平易であり非常に読みやすいものである。現象学の創始者であるフッサールの著書は、その語彙の難解さもさることながら、使用された語彙の意味が著作ごとに異なっていくことによる難解さがある。本書はその部分にまで説明を加えており、難解な現象学の理解を助けている。また著者は知的補助線と表現しているが、難解な内容を分かりやすく説明を加えている。本書は、単なるフッサール現象学の解説書以上の内容を有した優れた書籍である。

本書の主題は、「現象学とは何か」である。これを「現象学は如何にして成立したか」、「現象学は如何なる体系を持っているのか」、「現象学は如何なる可能性を拓くか」の3つ

の点から明らかにしているのが本書である。本書は3部から構成されており、上記の3つの点は各々第1部、第2部、第3部に対応している。

第1部では「現象学とは何か」という主題に対して、「事象そのものとは何か」という課題から始めている。そこでフッサールが現象学を構築する際、その源流としたものを取り上げながらこの課題の解説を行っている。著者によれば現象学には5つの源流があるとされる。①マッハによる直感経験に関わるもの、②ブレンターノによる志向性に関わるもの、③ロッツェとボルツァーノ、そしてライプニッツによるイデアリテートに関わるもの、④デカルトとライプニッツ、そしてカントによる学問の根拠に関わるもの、⑤ヒュームとプフェンダーによる超越論性に関わるものがそれぞれである。

著者はこの5つの源流から、フッサールが如何にして現象学を構築していったのかを詳細に説明している。

第2部では、フッサールの現象学の内容そのものの解説が行われている。フッサール現象学の解説に関する中核部分である。ここではフッサール現象学の全体構造の説明が試みられている。

まずは「対象」についての解説が行われる。現象学において、「対象」はそれを認識する主体とは関係なく存在するものとは捉えられていない。「対象」は主体との関係から、構築されるのである。この「対象」の構築は、3つに分類される。レアリテート、または実在性と呼ばれる「レアルな対象」、遍時間性を特徴とする「普遍時間的な対象」、そして「空想対象」がそれぞれである。また各々は①意味、②存在様相、③時間様相を有しており、基体・核により担われることになる。そしてこれらを構築する意識の機能の中心が自我である。

「対象」の解説に続いて「世界」の構造と「世界」の機能が説明される。「世界」とは、「対象」とは全く異なり、「対象」を存在させる空間であり時間である。「世界」の構造は、表層、中層、深層の3つの層によって構成されている。この3つの層は、意識の働き方によって分けられるものであり、表層は能動性、中層は受動性、そして深層は原受動性に各々対応している。

一方、「世界」の機能には、世界形式と世界実質がある。世界形式とは時間と空間からなり、「対象」の存在様相と時間様相、空間様相を可能とする働きを担っている。そして世界実質は、「対象」の意味を可能とする働きを担っている。但し世界形式と世界実質は、「対象」の存在のように主題化されることはない。

第3部では、フッサールの現象学の可能性が語られている。ここではフッサールの現象学が他の哲学者に与えた影響、そしてそれによって更に現象学が発展する可能性が述べられている。具体的にはハイデガーによる「存在の現象学」、フィンクによる「世界の現象学」、「メルロ＝ポンティによる肉の現象学」、「シェリングによる自然哲学」が語られている。そしてこれらの研究により、「存在」、「世界」、「肉」、「自然」が現象学における新た

な「事象そのもの」となる可能性が語られている。

またこれら以外に著者は、レヴィナスの他者論を取り上げている。世界の構造における中層を通じて深層に現れる他のモナドとしての他者、即ち「自然の他者」と表現される他者の問題が語られている。ここではフッサールの現象学における相互主観性が取り上げられている。相互主観性は、前述の自然科学の客観性に対する姿勢へのフッサール現象学からのアンチテーゼである。

以上が本書の極簡単な概要であるが、前述のとおり本書は優れた解説書以上の優れた学術専門書である。但し、敢えて1点のみ指摘すると、初学者が理解するにあたりフッサールの考えと著者の考えの区別がやや不明瞭と思われる箇所が見受けられる。